

鈴木明彦¹：奄美群島加計呂麻島徳浜の海岸漂着物

Akihiko SUZUKI¹ : Notes on coastal driftages of Tokuhama beach, Kakeroma Island, Amami Islands, southwestern Japan

奄美群島加計呂麻島は、奄美大島南部の瀬戸内町と大島海峡を挟んで、対岸に位置する島である。島の面積は77.15km²、外周は147.5km、最高点は326mである（日本離島センター 2001）。入り組んだ海岸線で特徴づけられ、面積に比べて長い外周を示す。今回、加計呂麻島徳浜で海岸漂着物を調査する機会を得たので、予察的に報告する。

2019年1月30日に加計呂麻島南部の徳浜（北緯34°9′39″，東経134°33′41″）で、海岸漂着物を調査した。徳浜は、両端を岩礁に挟まれた砂浜海岸である（図1）。徳浜付近の地質は、四万十帯の奄美コンプレックス役勝ユニットの砂岩泥岩互層からなる（竹内 1994）。放散虫化石に基づいて、主に白亜紀後期の地層と解釈される（竹内 1994）。なお、南東の岩礁には、“ライオン岩”とよばれる奇岩が見られる。

海岸では汀線に沿って、打ち上げられた漂着物を観察した。自然物では造礁サンゴと貝類の打ち上げが目立った。枝状のサンゴ片が密集している地点もあった。一方、人工物では、ペットボトル、プラスチック浮き、洗剤容器、使い捨てライターなどがあり、これらはいずれも中国製と推定された。

次に打ち上げ貝の観察では、大型のヤコウガイ *Turbo marmoratus* を確認した（図2）。定量的な調査を行っていないが、ベニエガイ *Barbatia fusca*、エガイ *Barbatia lima*、キクザル *Chama japonica*、リュウキュウザル *Regozara angulata*、カワラガイ *Fragum unedo*、アマオブネガイ *Nerita albicilla*、マガキガイ *Strombus luhuanus*、ハナマルユキ *Cypraea caputserpentis*、ガンゼキボラ *Chicoreus brunneus*、コウダカカラマツガイ *Siphonaria laciniosa* 等が認められた。

徳浜の打ち上げ貝類は、いずれも潮間帯から上部浅海帯に生息する種類であった。これらは、黒潮の影響下の南西諸島に普遍的な種類（肥後 1974；肥後・後藤 1993）である。また、奄美大島周辺にもよく見られる種類で、特に大島海峡対岸に位置するヤドリ浜の打ち上げ貝と類似した構成であった（鈴木・圓谷 2018）。



図1 加計呂麻島の徳浜外観



図2 徳浜に打ち上げられたヤコウガイ

引用文献

- 肥後俊一 1974. 奄美群島産貝類仮目録. 68pp. 九州貝類談話会, 長崎.
肥後俊一・後藤芳央 1993. 日本及び周辺地域産軟体動物総目録. 693pp. エル貝類出版局, 八尾.
日本離島センター 2001. 日本の島ガイド SHIMADAS, 1152pp. 日本離島センター, 東京.
竹内 誠 1994. 「奄美大島」20万分の1地質図幅. 地質調査所, 東京.
鈴木明彦・圓谷昂史 2018. 奄美大島の打ち上げ貝類. 漂着物学会誌 16 : 9-16.

(Received Aug. 22, 2019; accepted Sep. 20, 2019)

¹〒002-8502 札幌市北区あいの里5-3-1 北海道教育大学札幌校